

六

花



5

2023

りっかはいくかい

# 仏頂面

## 山田 六甲

春風や島の渡しの待合所  
海を見て一日暮せはらみ猫  
ほたへあふ伊豫長浜の仔猫かな  
尾を立てて猫歩み寄る桜貝  
うららかや陸の魚網に猫まどみ  
春宵の闇を引きずる川の音  
カナレージョ地区の運河や春の天  
ミモザ祭聖母マリアの赤き石  
ベネチアの迷路出られず春の天

千年の古都白川の初蛙  
物干しの綱張りゐたる春の天  
欄干のなき橋くぐる春の雲  
ネーブルを舟に山盛りなる運河<sup>ベニス</sup>  
猿は何食べてしのぐや春の雨  
春の闇仏頂面を拝しけり  
せせらぎの音足許に夕桜  
梅生けて薩摩おこじよの横坐り  
日に負けず槍の穂先の残り雪  
薄墨の鱗美し鯉のぼり

唐招提寺

近江八幡日牟禮たねや

# 雪蛩どすんと我を離れけり 笹村 政子

雪蛩はだれかの魂か、政子から離れていくとき心の中でドスンという音がしたような哀しいさみしい衝撃が起こった。ドスンとは自分の心の中に起きた哀しい衝撃が「どすん」と心臓を拳で叩くような衝撃で、自らを離れて行った魂の衝撃波が今になって身内に起きたのである。たしかにドスンと。  
ゆきぼたるどすんとわれをはなれけり  
(六甲)

# 朧月旅の終りの駅に立ち 浜田久美子

おぼろづきたびのおわりのえきにたち はまだくみこ  
旅の終りの気持ちをおぼろ月に託して詠んだ。おぼろには軽い安堵と旅づかれの気持ちも通う。「久しぶりに故郷に帰ってきた」という作者は故郷の様子が今月の作品には表れている。その思い出の幾つかの中に見た石鎚山の美しい残雪などに感動して句に詠んだ。その故郷への旅から作者の住む地の駅に帰ってきた。心地よい疲れの旅のおわりというのがいい。旅は無事に帰ってきてこそ朧月が佳い。  
(六甲)

# 雪うさぎ手すりの雪を掬ひては 志方章子

ゆきうさぎてすりのゆきをすくいては  
彼女は札幌に住んだことがあるが、その雪国の作品ではないと思う。だからこの冬初めて手すりに積もったわずかな雪で雪うさぎを作る。雪が足りないから何度も手すりの雪を掬って作る。それを「ては」という言葉を幹旋して表している。雪うさぎは盆などの上に、雪でウサギの形を作り、ユズリハを耳に、ナンテンの実を目にしたものを言う、と歳時記に。  
(六甲)

雪嶺抄

## 雪蛭 ◎ 笹村 政子

籠の鳥春立つ方へ放ちけり

浅春の鳥をくすぐる観覧車

二月礼者父のなじみの女客

そこここに土竜の気配草萌ゆる

吊橋の灯をゆすりたる雪女郎

雪蛭どすと我を離れけり

春塵や祖父の書齋のデスマスク

山焼の逸れ火を追へる勢子の影

山焼の雨筋みゆる煙かな

末黒野や昨日とちがふ風匂ひ

籠の鳥春立つ方へ放ちけり

陶淵明「帰園田居」に「羈鳥(きちょう)は旧林(きゅうりん)を恋(こ)い池魚(ちぎよ)は故淵(こえん)を思う」に出てくる籠の鳥を思つ。

おそらくお嬢さんの住んでおられた家から、籠の鳥を野に放たれたのだろう。根底には住みやすい所へ行って平和に自由に暮らしてね、という気持を込めたの放鳥。「春立つ方へ」という作者の願いが痛いほど伝わってくる。

雪蛭どすと我を離れけり

は政子のあくなき俳句へ挑戦の作品。「蝶墜ちて大音響の結氷期」に向かい合ったもので若き詩精神溢れた作品。夢風撰。

## 鯨死す ◎ 志方 章子

雪合戦わづかな雪を取りあつて  
 ことのほか外より寒き家の中  
 笑ひゐるやうでありたる寒牡丹  
 氷柱落つ大音響や北の国  
 鯨死す豊かな海に抱かれて  
 雪掻きの体力勝負なりにけり  
 雪うさぎ手すりの雪を掬ひては  
 風花や一人の家に帰りきし  
 冬苺畦に毒味をしてゐたり  
 ラグビーに憧れてゐる子を応援

はまなす抄

## ゆりかもめ ◎ 升田ヤス子

ゆりかもめ風に向かひて眠りをり  
 ねばならぬことより逃げて日向ぼこ  
 山焼きやほむらの筋のまたふゆる  
 土手焼けば鳥一斉に水しづき  
 教会の風が素通り枯蓮田  
 枯蓮の頭にも悩みの詰まるらむ  
 雲厚く垂れゐて鹿兒の亥巳籠  
 薄闇に祈るをみなや亥巳籠  
 二拍手は無音の仕儀に亥巳籠  
 亥巳籠にこにこ参る百日兒

鯨死す豊かな海に抱かれて

くじらしすゆたかなうみにいだかれて  
 鯨が海岸に打ち寄せられて死んだ。広い大洋に抱かれて悠々と暮らしているようだが、鯨が海岸に打ち寄せられたことよって、「海は以外に狭いのだ」と感じた人も多いのではないか。または大洋に住む鯨も死ぬときは陸に近づいて命を全うするのだとも思える。母なる海の汀に息を引きとった鯨にあれこれ思いを馳せる章子。海は豊かであるが、環境問題など徐々に悪化している。その豊かな海に抱かれてに生命のロマンがあるはずの海だが。鯨の季語は冬。雪うさぎの句は夢風撰。

ゆりかもめ風に向かひて眠りをり

ゆりかもめかぜにむかいてねむりおり  
 浮寝鳥が上流に向かって眠るのに注目した。なぜ上流に向かって眠るのか動物の本能か。日本の鳥百科によると「日本にいるカモメの仲間には、大きい順にシロカモメ、オオセグロカモメ、セグロカモメ、ウミネコ、カモメ、ユリカモメ、ミツユビカモメ。入江（いりえ）のカモメ・イリエカモメがユリカモメに転じたもの、百合を当て字にしたもの、という説もある。隅田川にいる都鳥はこれだという。『伊勢物語』第九段「東下り」の一節にでてくる、在原業平（ありわらのなりひら）の詠んだ「名にし負はばいざ言問はむ都鳥わが思ふ人はありやなしや」という歌でおなじみ。業平の時代に都に都鳥はいなかったという説も。風に向かって眠るのは分からずじまい。

ゆりかもめは冬の季題。「鹿兒の亥巳籠」（かこのいみごもり）の句はこれからも沢山詠んで欲しい季題。

火照る面 ◎ 善野 行

門に出て目を射られたる雪の朝  
斎場のドア閉ぢらるる寒さかな  
寒々と永遠の別れを告ぐるドア  
搔きついて来たる喃語や春隣  
日溜まりとなる蒲公英の二輪かな  
焰上げ形正しゆく池堤  
野を焼きし余燼に萌す息吹かな  
火照る面見せ合うてゐる野焼かな  
嬰兒の齒形あたらし紙雛  
お雛様納めて姪の門出かな

火照る面見せ合うてゐる野焼かな

ほてるつらみせおっているのやきかな

野焼きの炎に顔が日焼けのように火照って赤く  
なっている顔を仲間で見せあつて、「よう焼けたな  
あ」と自慢しあうというか、赤く焼けた顔は勲章で  
慰め称えあっている光景。炎の火でも顔がひやけの  
ように赤くなるのをよく野球選手が護摩壇の火に汗  
を流しながら精神を統一し、決意を揚げる修業をし  
ている様子をテレビで見ると。おなじように句の場面  
も顔が真っ赤になつてゐるのだろう。日焼けではな  
く火焼けである。火ぶくれの顔は野焼きの勲章であ  
る。嬰兒の齒型の句、「あたらし」に赤子の成長を  
顕著に見て成長を喜んでゐる句だが、掲句は客観的  
に観察して喜びを表現。「お雛様の句」も「納めて  
門出」というのに嫁に行く姪御を、万感の思いを込  
めて詠んだ。

垂水抄

立春や ◎ 永田万年青

野火走る畝の長さに煙立つ  
白煙の土手より野火の走りけり  
曇天に煙入りたる野焼きかな  
残る鴨潮の遡上にとどまりぬ  
三寒の挨拶で乗る送迎車  
気がかりな服のほころび夜寒かな  
春の闇灯のなき路地に踏み込みぬ  
目薬をさせば歪みしそぞろ寒  
若者のお喋り早し春来たる  
立春や駅ゆく人の軽き脚

立春や駅ゆく人の軽き脚

りつしゅんやえきゆくひとのかるきあし

他人が足軽く歩いている光景を詠んだ。他人の歩  
く姿によって自らを振り返る手法は万年青の進歩を  
示す。第三者を詠む事によって自らのことを言うの  
が俳句らしい。自分がどうのこつのと述べるのは主  
観が強く読者の共感を得にくくなる。つまり飽きら  
れるのだ。それを万年青は分かったようだ。立春と  
は節分の翌朝で暦の上でも春が来たという心軽やか  
な気分が漂う。道行く人も通勤の人も春らしい軽や  
かな空気に満ちている。「夜寒」の句も服のほころ  
びに俳味があり味がある。

6月号では彼とリサの特別作品が掲載される。六  
花に貢献著しい二人に主宰から感謝の意味を込めて  
六月号特別作品を依頼した。

## 菜の花 ◎ 出口 誠

もう少し寝たき建国記念の日  
洗濯をたたみて建国記念の日  
とりあへず昼食を買ふ建国日  
久々のサンドイッチよ建国日  
久々のカフェオレうまし建国日  
菜の花の倒されながら上を向く  
菜の花の茎ゆるやかにカーブする  
菜の花のボールとなりて集ひけり  
菜の花の茎の二手に別れけり  
菜の花の黄色のボール空を向く

菜の花の茎の二手に別れけり

なのはなのくきのふたてにわかれけり  
菜の花は春の代表的な花で、今は菜種油もキャ  
ノールオイルという。詠めそうで詠みにくい題材で  
もある。その原因はすでに手垢の付いた表現の多い  
句材で独創的な詩として詠むのは至難の技。しかし  
まことはその題材に正面から挑んだ。つまり虚子の  
言う平凡な句で嫌みのない詠み方。それは写生句で  
あるう。その通りに挑んだ。菜の花に近づいてよく  
観察してみた。すると意外や意外、句の通りの形で  
あった。それを何の銜もなく茎が二手に分かれて  
伸びているという。その先に菜の花が付いている。  
菜の花の句はあれほどの手練れの蕪村も当たり前  
幼稚な詠み方をして普遍性と古典性を得た。

## 白梅 ◎ 廣畑 育子

猫柳鯉の背中に見ゆる畔  
金縷梅の空をうかがふやうに咲く  
背のhigh順に臘梅匂ひをり  
臘梅の金の小鈴のふくらめり  
臘梅の青き小壺に含みをり  
風花にひとひら淡き梅散れり  
枝垂梅見目麗しき佇まひ  
撫牛の小さき祠梅が東風  
白梅のひとつほどけし楳かな  
隠沼の笹鳴きに耳すませる

白梅のひとつほどけし楳かな

はくばいのひとつほどけしすわえかな  
楳は「すわえ」と読む。すわえとは木の枝や幹か  
らまっすぐ伸び出た、若く細い小枝のことで梅など  
は緑色。その枝から梅の花が一輪咲きかけていると  
いうのだ。春の魁けで春をいち早く感じ取った梅の  
花を見て感動を覚えたに違いない。白梅は芳しい匂  
いが漂う。「撫で牛」は天満宮や菅原道真を祀った  
宮に据えてある。牛は天神さまの「神使」としてよ  
く知られ、菅原道真は、丑年の生まれでその生涯を  
通じてよく勉強に励まれ右大臣に任ぜられたが、そ  
のめざましい昇進を妬む者の策略によって、京より  
九州大宰府へ左遷、牛車で配流先へ向かう道中、牛  
によって待伏せの賊の難を逃れたと伝えられ、自分  
の身体の病んだ部分や鼻の悪い部分をなでたあ  
と、牛の身体の同じ箇所をなでると、悪いところが  
牛に移って病気が治るといふ俗信がある。

## 義理チヨコ ◎ 谷口 一献

若草山焼きし煙の籠りけり  
 山焼の炎肴にカツ酒  
 燻り出され虫は焼野を駆け巡る  
 義理チヨコも死語となりつつ貫ひけり  
 鎮魂の海はのたりと広がれり  
 息潜め池に群れゐる春の鴨  
 うす濁る真鴨の池の冴返る  
 体温計啞へる艶も春の風邪  
 不器用は父親譲り山笑ふ  
 石垣の傾いてをり白水仙

## 針供養 ◎ 江見 巖

節分の悪魔もどきの芸者かな  
 関取の目の前に撒く追儼豆  
 梅林や雲水二人進み行く  
 まんさくやよぢれ切つたる絵馬の紐  
 バレンタイン不美人なるは虎魚かな  
 若鮎のさざなみ音を消して行く  
 吃水の深さ重さや浅蜷舟  
 けんかして言葉のにぐる蜆汁  
 勾玉の穴より富士の建国日  
 針供養道具の針に神宿る

義理チヨコも死語となりつつ貫ひけり

ぎりちよこもしごととなりつつもらいけり  
 バレンタインデ이의傍題。「愛のチヨコ」とも。  
 初めは女性から男性に贈る真心のチヨコレートであつたが、最近では義理のために渡すのももうやめようという空気が広まっている。義理堅いのも日本人の美しい慣習だが、現代ではもう古い。昔百貨店で菓子の担当をしていた時初めてバレンタイン売り出しで関西では、当時大人気だった桂三枝、西川きよしさん売り場に呼んで大混雑。そのころは東京メリーチヨコ、モロツフ、ゴンチャロフなどが主流でのちベルギーのゴデイバなどが入って来た。

掲句は「義理はもう古いんだがなあ」と分かつていても義理で受け取ったチヨコレートで、ありがたくもあり、ありがたくもなし。しかしボンボンチョコにウイスキーやブランドイヤーはあるが日本酒ボンボンはいまだない。そのうち出来るかも。

針供養道具の針に神宿る

はりくようどうぐのはりにかみやどる  
 使っていた針の供養をしたらその針に神が宿って慰めているという。神が宿った兆候はないけれど確かに神が宿ったと感じている。針はものを刺すために使われて来た。その針をお疲れさま、と柔らかい豆腐に刺して慰めたので成仏したのであろう。それを刺した時の指で感じた針の神。針供養は2月8日「女性を守る淡島神（あわしまのかみ）」をまつる淡嶋神社（粟島神社）や淡島堂を中心に、各地の社寺で行われちという。2月8日を『事始め』の日とされているので、農作業や裁縫仕事の手を一旦止めて休み、そこからまた新たに一年の作業を始めましようと言っ考えがある。春。



## 野面焼く ◎ 田尻 りさ

野火の中より走り出る男かな  
 手を繋ぐ子の増えゆくや野火走る  
 野面焼く火のバレリーナ立ち上り  
 崖の縁野火ひらひらとうろたへる  
 末黒野に命生まるる香のありぬ  
 この命永久にはあらず今朝の春  
 初雪や靴跡集まるごみ置場  
 やはりまた街に出て行く春隣  
 果てしなき虚無の時間や春の我  
 末黒野の只只続く草千里

野面焼く火のバレリーナ立ち上り

のずらやくひのばれリーなたちあがり  
 草が燃え上がる様子がバレリーナが立ち上がった  
 踊っているように見えたりさの見立ての句。深い意  
 味はないが、思い付きでは独創的だと思える。草が  
 燃える時渦が出来てくると火の渦が出来、その  
 様子は共有できる。「末黒野」の句は燃えたあとの  
 焦げ臭いのもその跡から新しい草の芽が吹いてくる  
 のも命が生まれてくる匂いだと期待する。夢風撰候  
 補。「やはりまた街に出て行く春隣」も春がそこま  
 で来ているから外出したくなるのだらう。春がそこ  
 ままで来ている句。虚無の時間は考えないほうがいい。  
 りさらしい句をもつと詠んで欲しい。

## 山焼き ◎ 草場つくし

寒暁の城垣に射す光かな  
 何事も終りはあるよ春隣  
 まだ固き蕾の先の余寒かな  
 余寒とは無縁なる子ら風の中  
 草千里服に染み込む野焼の香  
 山焼の風と折り合ひつきにけり  
 城跡の真ん真ん中で土筆摘む  
 水温む池に轟く影のあり  
 久々に吉報のあり春一番  
 古雛の鼻先黒く飾らるる

水温む池に轟く影のあり

みずぬるむいけにうごめくかげのあり  
 轟く(うごめく)は物かもぞもぞと動くという意  
 味で水もぬるんでくると水も水中動物も動き出すと  
 いう光景を捉えて詠んだ。はつきり言っていないが  
 魚などが蠢き始めているようす。鮒や鯉は乗っ込み  
 の季節に入るので産卵活動を始めて水際もにぎやか  
 になる。その注目して春がきたのを実感している。  
 また芭蕉は蛙が水に飛び込んだといって春を音で描  
 いたが作者は蠢くものを捉えて春の到来を掴み取っ  
 た。由た「山焼きの風と折り合ひ」という表現が巧  
 い。山焼きには風を敵にしたら飛んでもないことにな  
 る。「あるていと燃やし、或る程度抑えて行かな  
 ければいけないのである」つまり折り合いが大切。  
 その間合いを詠んで見事、夢風撰候補。

海苔ひび ◎ 磯野青之里

立春の香り求めん風の中

まづ一献立春新酒語り合ふ

海苔浜の彼方は海峽跨ぐ橋

薄氷の裏に印さる水の紋

大根穴底の暗さや冴返る

衣の糸抜けば織生地針供養

手の平に色こぼしけり鶯餅

分校の生徒すくすくヒヤシンス

歯ざはりの音こそ水菜葉の尖り

ゴダイバの愛深しバレンタインデー

海苔浜の彼方は海峽跨ぐ橋

のりひびのかなたはかいきょうまたぐはし  
海苔浜（のりひび）は「浅海に柴や竹簀などを立て並べ、一方に口をあけ、満潮時にはいった魚を干潮時に捕える漁業施設。春の季節。また、海苔（のり）や牡蠣（かき）を付着させるため海中に立てておく粗朶（そだ）ひみ」（百科事典）でよく見かける風物。場所は播磨灘あたりであろうか。遠くに明石海峡大橋を望む光景。ウグイス餅の句、鶯餅は春の餅。鶯色の黄な粉をまぶして柔らかく美味しい。主宰の近所では鶯餅だけは美味しい菓子店があり、春にしかならないという。ほかの季節にも名前を変えて作るというのにも思う。鶯粉を零しながら食べるのも春らしい菓子。「分校」の作品。教師不足から分校が無くなり、小学校も統合されて行くのいいのかわるのか。政府はも子育てのことも本気なのかあやし。